

紹介と批評

ベフルーズ・ブチャーニー

(一谷智子・友永雄吾監訳)

『山よりほかに友はなし』

——マヌス監獄を生きたあるクルド難民の物語——

『語』

はじめに

現代オーストラリア論を一九八三年に法学部政治学科専門科目として慶應義塾大学三田キャンパスに開講してから二〇一六年に退職するまで教え続けた評者が、退職し数年というこの時期に本書を読むのは少々辛い。

というのは、本書は多文化主義国家であるはずのオーストラリアがそのことをすっかり忘れたかのようになり振る構わず、インドネシア方面から檻樓船難民船で大陸北部を目指してやって来る亡命申請者のボートピープル(BPPs)を入国法違反の犯罪者(特別法犯)と見做し、海軍を動員して、難民船をインドネシア方面に追い返す、あるいは

は、拿捕して国外(この場合パプアニューギニアとナウル)の強制収容入国審査センターに長期収容して、BPPsにオーストラリア入国と永住を諦めさせて追い返す(帰国に追い込む)という、国連の難民条約を早期に批准している国家としては恥ずかしいほど甚だ非人道的な政策(パシフィック戦略やストップザボート作戦)を採用していること、そして、収容所の収容者に対して呆れるほど非人道的な態度に出ているのかを明らかにする。それだから評者にとっては辛い本だといえる。

評者はオーストラリア連邦政府(正確には豪日交流基金)から「オーストラリアは一九七〇年代に白豪主義を終わらせたので、それまでの年配の日本人の多くがもつ人種差別国家オーストラリアというイメージを払拭し、自由・平等・人権重視国家に変容したことを日本の大学で講義してほしい」との依頼を受け、豪日交流基金の資金援助のもと一九八〇年七月より八三年三月までオーストラリアに留学して授業の準備をし、多文化社会となったオーストラリアの政治・社会変動と国民の間の人種関係の動向、そしてアジアのヨーロッパ閉鎖国家からアジアの開放的アジア太平洋国家への動きについて講義してきた。その際、全体としては明るいイメージの授業を心掛けてきた。それは「自

称オーストラリア政府御用達学者の面目」ということだが、当然、批判も受けた。

そのことはともかくも、オーストラリア政府の現代オーストラリア論開講依頼には、白豪主義終焉後にオーストラリアが多文化主義を導入したことについての言及はなく、留学開始直後に多文化主義導入のことに気が付いた。多文化主義は当時では世界的にみても斬新な概念だったし、オーストラリアでも多文化主義導入直後の一九八〇年代には大いに期待されていたこともあり、このことを大学での授業の主要テーマにしようと思った。

大学での授業開講後にすぐ多文化主義論を中心とした授業ができた訳ではなく、一、二年の猶予が必要だったが、授業内容は、大学だけではなく日本の学会でも大いに歓迎された。一九八〇年代前半の日本では外国人労働者に国内労働市場の門戸を開くか否かの「鎖国・開国論争」が起きていたこともあり、開国論者の多くが多文化主義に興味を示してくれた。もちろん鎖国論者の多くは批判的だった。それ以前は移民・難民の社会統合研究は日本ではマイナーな研究テーマだったが、以後は関心をもつ研究者が続出した。多文化主義は、近年では外国人労働者や移民・難民を多く受け入れている国々や地域では必要不可欠なものと評者に

は思われるが、しかし、外国人人口を多く抱えている欧米諸国では人気がなくなっている。むしろ多文化主義に反対する極右やポピュリストが増殖していて甚だ気色悪い。多文化主義の本家とよく指摘されるカナダやオーストラリアでも同じである（近年ではフランス、ドイツ、オーストラリアにおいて日本では極右政党と表現されることの多い保守系政党が総選挙で第一党や第二党になるケースも増えてきている）。

本書の原書が二〇一八年にオーストラリアで出版されると、オーストラリア連邦政府のBPs政策の過酷で非人道的なことを改めて体系的に明確にしたルポルタージュだとしてオーストラリア国内で評判になるとともに高く評価された。その際に、本書が文学としても高く評価されたこともあり、日本のオーストラリア文学研究者の目にとまりその存在が伝えられた。結果として日本の若手研究者により二〇二四年二月に翻訳出版となった。オーストラリアのBPs政策が酷いということは、国内外のオーストラリア研究者の論文や報告書にて断片的に評者も理解していたが、これほど酷いことをやっていたのかと改めて驚いた。無視したい本だが、無視する訳にもいかないので、以下「紹介と批評」をしたいと思う。

内容紹介

本書の目次は以下の通り。

まえがき（リチャード・フラナガン）

翻訳者の物語——山並みを見晴るかす窓辺（オミド・ト

フィギアン）

免責事項

第一章 月明かりの下で／不安の色

第二章 山々と波／栗の木と死／あの川……この海

第三章 煉獄の筏／月は恐ろしい真実を語るだろう

第四章 軍艦での瞑想録／我らがゴルシフテは実に美し

い

第五章 クリスマス（島）の物語／流浪の星へと追放さ

れた国なきロヒンギヤの少年

第六章 さまよえるコリースたちのパフォーマンス／メ

ンフクロウの監視

第七章 爺さん発電機／首相とその娘たち

第八章 列という名の拷問——マヌス監獄の論理／幸福

な牛

第九章 父の日／巨大なマンゴーの木と優しい巨人

第一〇章 コオロギたちの合唱、残酷な儀式／マヌス監

獄の神話的地形

第一章 カモミールに似た花／感染症——マヌス監獄

症候群

第二章 黄昏時／戦争の色

翻訳者の考察（オミド・トフィギアン）

注釈

日本語版刊行に寄せて（オミド・トフィギアン）

山よりほかに友はなし——その背景（テッサ・モーリス

スズキ）

監訳者あとがき（一谷智子・友永雄吾）

著者・訳者・寄稿者紹介

本書の目次にあるように「翻訳者の物語——山並みを見晴るかす窓辺」および「翻訳者の考察」、さらに「日本語版刊行に寄せて」の三つの文章が掲載されている。それらはブチャーニーの原文を英訳したオミド・トフィギアンによるものである。英語の本書を日本語に翻訳したのは監訳者一谷智子・友永雄吾と三人の翻訳者である。ブチャーニーはイラン国内居住のクルド人だったが、本書をベルシャ語で書いたのがイランからオーストラリアへの移住者であるオミド・トフィギアンが英訳したのである。ブチャーニ

ーはマヌス強制収容所において、禁止されている携帯電話（スマホ!）を密かに入手して看守たちの目を盗んで文字情報を発信した。その文書を受信し最初に翻訳して新聞紙上で公表したのは別人だが、その文章を読んだトフィギアンが、ブチャーニーの文章の公表を目論んだプロジェクトチームに全文の翻訳を申し出て参加することになったのである。

三つの文章には、主に、ブチャーニーからの文章がどのような経緯で翻訳出版されたのか、その際に関わった人々や出版社の仕事ぶりが論じられるとともに、トフィギアンによる本書の背景や意義などが簡明に論じられている。またテッサ・モリス・スズキによる文章は、トフィギアン同様に本書の意義を論じるとともに、オーストラリア人として恥ずかしくなるようなオーストラリア政府による一九九〇年代以降の難民政策の概要とマヌス強制収容所での収容者への扱いの酷さに大いに憤っている文章である。監訳者による「あとがき」は、監訳者それぞれが本書に出会い翻訳するに至った事情を説明するとともに、本書の意義について各々の専門家としての視点から論じている。一谷は文学者として、友永はオーストラリア・アボリジナル研究者として、

リチャード・フラナガンによる「まえがき」、翻訳者、邦訳者、寄稿者による本書の意義についての議論はいささかどく辟易するところもあるが、それだけ本書のもつ意義が大きいのだろう。本書の内容や意義についての紹介と分析は、加藤めぐみ明星大学人文学部教授によるしつかりしたものもあるので、ここでの評者による本書の内容紹介は重複を避けながら評者なりの観点から簡潔にしておきたい。

なお、内容紹介に際して本書が通常の下キュメンタリーではないということにも触れておきたい。本書の翻訳者や寄稿者、そして監訳者が一様に指摘するのはその文学的、時には哲学的な価値をもつ内容である。マヌス監獄での様々な出来事や本書に登場する人々の思いや憤怒に基づく行動を単に客観的に記述するというよりは、ある時には文学的にまた詩的に（実際多くの散文詩が含まれている）、またある時には哲学的な回想・考察や分析が各所に織り込まれている。さらに、ブチャーニーは普段はやかましい収容所のなかで、静かな時と場所を見つけて、自らの処遇や置かれた状況について思索・熟考するだけでなくマヌス収容所の拷問に近い（否、拷問そのものというべき）待遇とその待遇の維持・管理・監視をするオーストラリア人看守

や、パプア人補助労働者について、時には社会学的な考察を加えている。それはブチャーニー自身が本書を単なるドキュメンタリーにしたくなかったことにもよるが、そのために、収容所内の出来事や人々の行動が分かりにくくなっている。しかしそれは「免責事項」の項目で記されているように、ブチャーニーの原文が翻訳されオーストラリアで公表された際に、ブチャーニーが記述した出来事の生じた時と場所やそれらに関わった人物（オーストラリア人、パプア人そして収容者たち）のアイデンティティが特定されてはまずいからでもある。

収容者の名前は伏せて、動物の名前や父とか母、青年、子ども、時には首相、哲学者、預言者などと表現し、人物の特定ができないように曖昧にしている。なかには、ブチャーニー自身が収容所の生活がより明確に分かるようにするために想像し創造した架空の人物もあるようだ。しかも看守の目を盗んでの情報発信であり、発信された文書が完結していないことや時系列的に並んでいないこともあり、翻訳者が編集に苦労しており、その分さらに分かりにくくなっているところがある。そうしたことを念頭に置きつつ、評者なりに時には想像力を働かせつつ紹介をしたい。

第一章から第五章ではインドネシアに到着したブチャーニーが二回の密航に失敗して、最終的にはオーストラリアのクリスマス島のBPS強制収容所に連れて行かれて屈辱的な目に合うことになる。第一章ではイランのクルド人ジャーナリストとしてイラン政府批判をしていたブチャーニーがイラン政府のクルド人迫害から逃れてインドネシアのケンダリまで辿り着いたところから物語は始まる。到着後三か月ほどホテルの地下室に潜み、難民船に乗るまでじっと耐えている。難民船に乗る日に人間密輸幹旋業者のトラックに乗り出航地まで行く間の一緒に密航するトラックの同乗者の様子が明らかに。同乗者のなかには恋人同士や小さい子どもや赤ん坊を連れた家族連れもいる。

第二章から第四章では、二回にわたる密航が失敗に終わる。第一回目の密航船に乗る際の密航者たちが見せた狭い密航船内での居心地のよい居場所を求めての醜い争いが描かれている。同乗者たちが落ち着いた後に、密航船の船底に穴が空いていることから、侵入してくる海水を汲み出すために設置されていたポンプが壊れたため、侵入する海水を汲み出そうと船の機関士（助手）と同乗者の若者とブチャーニーの三人でバケツを使った水の汲み出しリレー作業が続けられる。しかし三人の努力も空しく、檻樓船のエ

ンジンも止まり密航船が沈没寸前となった時に一隻の船が救助に来た。密航者たちが救助されている間にも救助の順番を巡る醜い争いが生じたが、救助を後回しにされたブチャニーが乗ったままの密航船は沈没してしまう。危うく溺れ死ぬところだったブチャニーは沈没船の残した木材に掴まって溺れずに済んだ。同乗者たちはインドネシアに再上陸した。この失敗にもかかわらず同乗者の半分近くは二回目の密航に挑戦する。しかし二回目の密航船も檻樓船だったので公海上で再び救助される羽目になる。今回ブチャニーたちを救助した船は英国籍の貨物船らしく、救助した人々をオーストラリア海軍に引き渡した。そのため、第四章では最終的にオーストラリアの軍艦でクリスマス島の強制収容所まで連れて行かれる。その間ブチャニーはすることもないので自分の今についてあれこれ思索・瞑想するが、船上では今度は居場所ではなく、食事を巡っての醜い争いが男中心に起きる。だが、ゴルシフテとブチャニーが名付けた気の強い女性が、男どもから食事や菓子を奪い取り、女性や子どもたちに分配するという勇敢な行動をとったことにブチャニーは感動する。なおクリスマス島に着くと一瞬だが自由な国オーストラリアに着いたという気になった。

第五章では、ブチャニーは屈辱的な目に合う。クリスマス島の収容所ではだぶだぶの囚人服みたいな上下を渡されるとともに、自分たちが収容所においてトイレの最中を含めて四六時中監視されていることに気付く。また、裸にされての身体検査がしばしば行われることに加えて、数度の尋問が行われたが、それは入国審査ではなく、犯罪者への取り調べに似ていることから、自分たちが亡命申請者ではなく不法入国者としての犯罪者（密航者という特別法犯）として扱われていることに気が付く。それはさらに（第六章で明らかにになる様に）、マス収容所では密航者たちは名前ではなく番号と記号の組み合わせ（ブチャニーは453MEG）で呼ばれることでも明らかにになる。これ以降ブチャニーの名前は呼ばれなくなる。と同時に自由な国オーストラリアに来たという自覚が失われる（なんでこんな所にいるのだ!!）。

第五章後半はクリスマス島から飛行機でダーウィン飛行場を経てマス島まで輸送される。ダーウィン飛行場でクリスマス島収容所が用意したオーストラリアのジャーナリストたちから、自分たちが密航犯罪者としてインタビュされたり写真を撮られたりして大いに屈辱感を味わう。インタビュ後にマス島へ飛行機で連れられて行く。そこ

は毎日四〇度以上の灼熱の地でマヌス監獄の収容所の周りはジャングルと鉄条網に囲まれていた。この辺りの記述からブチャーニーはマヌス強制収容所を「マヌス監獄」と呼び始め、自分たちを「囚人」と表現するようになる。その理由は、マヌス強制収容所はオーストラリアへの入国審査を待つ場所ではなく、収容者たちを酷い目に合わせて、オーストラリア入国を諦めさせるか、あるいは帰国するか、さらにはパプアニューギニアへの入国を迫るための選択の場所に過ぎない絶望の地であることが理解できたからだ。マヌス収容所は死刑囚か無期懲役犯の刑務所のようなのだ。

第六章から最後の第二章まではマヌス監獄での出来事やマヌス監獄での生活はまさに拷問であるという観点から描かれる。と同時に監獄の管理・支配システムはキリアーカルシステムという非人間的な管理制度であり、それは囚人から人間としての尊厳や人間性を奪い、人間としてではなく家畜動物のように管理する制度であることが明らかにされる。第六章の前半では、かなり曖昧ではあるがマヌス監獄の全体像や監獄内の生活地域であるフォックス居住区（ブチャーニーはこれも監獄と呼ぶ）、そして住居などに注目する。フォックス居住区以外にも二つの居住区があるが、各々は鉄条網で区分され往き来は出来ない（往き来するに

はバスが使われる）。ブチャーニーの入った部屋は狭いが、以前に住んでいたと思われるイラン家族の残した落書きを見て小さな子どもまで収容するとはどういうことかとオーストラリア側の措置に憤ると同時に、その家族の無事を願う。ブチャーニーは第六章のクリスマス島においてもクルド人の子どもが一人収容されていることに気づき憤っている。なお、かつてのマヌス収容所では収容されていた人々は入国審査を受けオーストラリアに入国したものもいたのだ。マヌス監獄の管理がGS4とよばれる民間の警備会社に委嘱されており、その従業員の多くは元軍人や元警察官が多く、囚人管理のスペシャリストであり、その対応の過酷さと冷酷さと悪名高いことも分かる。補助労働者であるパプア人は、GS4から収容者たちは危険な連中なので親しくなるなといわれており、よそよそしい。収容者たちにはマヌス島人は元人食い人種だと伝えられているようだった。それもキリアーカルシステムの特徴であるとブチャーニーはいう。

本章では、第八章で体系的に明らかになる監獄での日常生活につきものの何事も列を作って待つという生活の一部が披露される。監獄はごみごみしており騒がしいところだが、トイレの時間はブチャーニーだけでなく多くの囚人に

とつても孤独になりホッと一息つける場所のはずだが、ここでは、食後は多くの囚人にとつてもトイレの時間となるので長い列ができることが多い。並んでいる囚人からの「我慢できない早く出ろ」との罵声が浴びせられて落ち着けない。トイレはパプア人が毎日掃除するが汚い上に壊れていないものは少ないので列ができやすい。しかし、これは何事も監獄の秩序を維持し、混乱を避けるために GS 4 の監獄側が列をつくらせるのである。列をつくらせた上でトイレの近くにオーストラリア人看守が椅子に座って見張っている。フォックス監獄はサッカー場よりも狭いが四〇〇人も囚人が詰め込まれているのである。

第六章の後半では、男娼メイサムと名付けられている若い男が中心になって夕食後のパフォーマンスが行われる。監獄のメイサムの部屋の前の廊下にステージがつくられ、その上や周りで仲間の男たちの踊りが始まると他の囚人の注目を引き、ステージの近くに多くの囚人が集まる。すると男娼メイサムが独特な姿でパフォーマンスを行う。囚人たちは大声を挙げて騒ぎ出す。この騒ぎをオーストラリア人看守やパプア人労働者は遠巻きに見守るだけで放置している。なかにはトランシーバーで何やら連絡している看守もいるが騒動を止めようとはしない。トランプやバックギ

ヤモンなどのゲーム一切が禁止されていて、ほとんど何もできない囚人たちのストレス発散のため放置されているのかもしれない。女気のない監獄でもあり、これはゲイ・パフォーマンスである。

第七章では、マラリアの感染を防ぐための黄色い薬を求めて、毎日夕方になると薬を配布するためにやって来る看護師の前に囚人たちは列をつくる。監獄の周りはマラリアを媒介する蚊が多く、囚人たちはマラリア用の薬を得るために必死になって列に並ぶ。もつとも後にマラリアは蚊が媒介するというのは嘘だという話が囚人に伝わり、この列はなくなる。だが医療室の前の列については後の章に再登場する。本章では再びトイレが登場する。ブチャーニーは一人で瞑想に耽るのが好きなので、トイレの列を避けて、監獄の端の人の来ない場所でトイレを済ますことが多い。しかし、人が来ないと思っているとトイレの最中に同じことを考えている囚人に出くわすことがあり、その人物と後々監獄の廊下で会うような時には気まずい思いをすることになる。悲劇的なことも起きる。

監獄には首相と名付けられた元裕福な商人で威風堂々とした人物がいた。首相は他の囚人から尊敬の目で見られていた。首相はトイレの列に並ばず必ずトイレが空いている

時間に用を足すよう体調をしつかり管理していた。しかし、監獄の発電機は古くしばしば壊れるので、そんな時はトイレが使えなくなることもや空いているはずの時間に列ができることも多い。いつもの時間にトイレが使えないと、首相は急いで監獄中のトイレを探す。列のためすぐ使えるトイレがないと分かると、ブチャーニーと同じように監獄の敷地の人気のない場所を探す羽目になる。そして人に見られないように用心深く用を済ます。しかし、ある時運悪くこれを男娼メイサムが見つけて他の囚人たちに面白可笑しく話した。そのため首相は恥ずかしさの余り、GS4に申し出て、オーストラリア入国を諦めて、娘たちのいる故国に帰国することを申し出たのである。ブチャーニーはこれこそがキリアーカルシステムのマヌス監獄の目的なのだという。監獄側では発電機が壊れると扇風機も止まり、生活環境が最悪になるので、暴動を防ぐためしばしば修理をするが、新しい発電機と取り換えようとはしない。おんぼろ爺さん発電機とその不調こそマヌス監獄の目的達成のための貴重な道具なのだ。

第八章では、マヌス監護の囚人管理と支配論理である列の代表である食堂の列をめぐる様々な騒動が生じる。今までの章でマラリアの薬を求める列やトイレの列の理不尽さ

を見てきたが、本章では朝昼夜の食堂の列がまず登場する。食堂では食事時間ごとに列ができる。食堂の前に看守たちが揃うと、五人ずつグループをつくり、囚人番号を確認して順番になかに入れる。この食堂が一杯になると食堂の前に長い列ができる。食堂の前に長い列ができるのは、食堂の料理で最初に提供される料理の量が多く盛られているからであり、次第に料理は減り、なくなると食事にありつけない連中が出るからだ。これは、料理を公平に平等に満遍なく与えるというよりは、早く料理作業を終えたいと監獄の料理人たちが目論んでいるからだ。看守はそのことに苦情をいう囚人の申し出は無視し、ただひたすら列とグループの動きの管理に集中している。

また囚人のなかには列を大人しく待つのを無視して、適当な所で列に横入りするものが出るので、時々騒動が起きる。だが看守たちは騒動を収めることに関心はなく、横入りによる騒動には対応しない。囚人たちの間で解決するしかない。ともかく看守たちには列を維持して監獄内の秩序を守ることが第一で、囚人の生活環境については無関心であるように命令されているようだ。囚人のなかにはこうした秩序に積極的に従う者もいる。食堂の列に早く並ぶために、食事時間のずいぶん前から列の先頭にいるものもいる。

日に三回早くから並んでいる囚人は一日の大半をそのために費やしている。時にはジュースやお菓子のおやつも出るので、そんな時も彼らは並んでいる。ブチャーニーはそうした囚人をはじめとして、監獄内の囚人は、人間ではなく家畜扱いされていると慨嘆する。まるで餌を待つ牧場の羊や牛のようだ。先頭にいつも並んでいる囚人をブチャーニーは牛とかラバなどと命名している。なお、ブチャーニーは夕食後から朝食の間の時間が長く腹がすいてたまらないという。酷暑の日中の列と同様に拷問である。

本章には食堂の列以外の列も登場する。煙草の配給を巡る列や、電話利用の列である。煙草配給の列には煙草を吸わない囚人も並ぶので長くなる。煙草を吸わない囚人は、煙草を吸う他の囚人や看守、そしてパプア人労働者に便宜を図ってもらう時に一種の賄賂として煙草を利用できるから並ぶ。ブチャーニーは煙草配布もキリアーカルシステムの一部だという。煙草を利用して列をつくらせて囚人を管理しようというのである。食堂の列同様厄介なのは電話の列である。電話は週一回あるいは数日に一回の割合で利用できる。電話室がフォックス監獄にあるが、やはり、利用に当たり看守が立ち会い、食堂同様に列をつくらせ、数人ずつグループに分けて利用させる。ここでも横入り騒動

が起きるが、食堂同様に看守は無関心だ。もっと厄介なのは電話室の数台の電話のなかには壊れているものが多く、使用できる電話を巡って囚人同士の間で喧嘩がほぼ確実に起こることだ。電話の修理をきちんとせず、使える電話の取り合いを行なわせ、看守たちは早く囚人を列に並ばそうと目論んでいるのだろう。その上で、例えば何か緊急に電話を使いたい囚人が出ても、「申し訳ないがボスに聞かないといけない」といってほとんど対応しない。

第九章では電話をめぐる騒動が起きる。赤ん坊の父親とよばれている囚人が、ある日故国の家族と連絡を取り、赤ん坊の父親の父親が危篤状態にあることを知る。父親と直ぐにでも話をしたい赤ん坊の父親は次の順番が来る前に電話をしたくなり電話室の前の列に加わった。その際、列の囚人のほとんどはそのことを黙認したが、電話室の前の看守は対応しなかった。例外的な事に対応するにはいい組織のボスに連絡する必要があるからだ。この時囚人のなかの自称リーダー格の一人である口髭の濃い男と名付けられた人物が、赤ん坊の父親に替わり、看守に抗議しボスと呼び寄せたが、結局ボスは、規則は曲げられないとして父親への電話を許さなかった。その結果、次に赤ん坊の父親が電話した時は父親が死んだ後だった。それまでは監獄側

の対応に大人しく従っていた赤ん坊の父親は堪忍袋の緒が切れたのか大声で喚きだしたので他の囚人もそれに加勢しだした。今度は暴動やら反乱の兆しを危ぶんだボスは、突撃隊のストライクフォースを連れてやってきた、騒ぐ赤ん坊の父親は暴力的にねじ伏せられた上に手錠をかけられて大人しくさせられた。濃い口髭の男も何もできず、長いものには巻かれろとして地面に放置されている赤ん坊の父親を見守るだけだった。

本章の後半では、監獄の建物の近くに生えている大きなマンゴーの木が登場する。マンゴーの木は大きな実を実らせている。それが時々落ちてくるので、その実を取り合う騒動も起きる。ただしマンゴーの実は監獄の建物の屋根に落ちて地面には落ちてこないこともあり、取り合い騒動は大きく成りにくい。大きな騒動に繋がる兆候がないので看守たちは放置する。

ここで本書から列に関する散文詩の一節を引用（三二七―二八頁）しておきたい。

（前略）

オーストラリア人の係官たちの高圧的な視線

囚人たちは緊迫感の張り詰めたトンネルに閉じ込めら

れている

来る日も来る日も

人生の不条理に遭遇する

ついに人生はこんなになってしまった

これが人生のために作られたモデル

列という技術によって時間を無駄にさせる

身体熟练操作と搾取によって時間を無駄にさせる

その身体は剥き出しの状態で放置され

その身体は詮索の対象とされる

他人の手で弄られ

他人の視線に晒される身体

人間の生を冒瀆するプログラム

プログラムとはキリアーカルシステムであろう。第九章から第二二章までしばらく列から離れる。第六章から第九章まで、マス監獄の囚人への対応が非人道的で劣悪なる仔細が明らかになった。このような扱いは囚人たちにはオーストラリア入国を諦めさせ、パプアニューギニアに入国するか、あるいは帰国するかという選択肢しかないことを、身をもって知らしめるためであった。監獄のなかでオーストラリア入国の希望がないまま酷い非情な扱いのもと

にいと、囚人たちの精神は病んでいく。そのストレスは第一〇章では夜のマスス監獄の闇に響き渡る「うめき声」となって現れる。ある日ブチャーニーは、監獄が鎮まる夜に監獄の建物の屋根に登り、いつもの思索・瞑想・回想に耽ろうとしたが、そこにはいつものようにコオロギの合唱が聞こえるだけでなく、独房の建物があるグリーンゾーンと思われる方角から、人のうめき声が聞こえるのであった。しかし、うめき声はしばらくすると止まり、ブチャーニーは一人長い思索と瞑想に入る。ブチャーニーは静けさのなかで自分が、イラン・イラク戦争の最中に生まれた戦争の子であることを思い出し、子どもの時の戦争と、クルドの山のなかで過ごしたことを懐かしく思い出す。今の方がその時より酷いのだ。しかし、ブチャーニーの思索と瞑想は、うめき声が叫び声に変わったところで終わる。

叫び声は普段は大人しい予言者のものだった。予言者が突然建物より出てきて喚き続けるので、電話で問題を起こした赤ん坊の父親を暴力的に押さえつけた突撃隊タスクフォースが登場し、赤ん坊の父親同様に暴力的に予言者をねじ伏せ、地面に寝かせて静かになった予言者を放置していた。その後医療チームが派遣され地面に横たわったままの予言者の治療が行われたが、それは治療とはいえない表

面的なものだった。その後数日経って、マスス監獄には体の線がはっきりとわかるようにびったりのスーツを着た若い女性の弁護士がやってきて、彼女たちを見て興奮した囚人たちと対話を始めた。それはオーストラリア入国のための審査や手続きの話ではなく、パプアニューギニア入国のための手続きについての相談会であった。

第一章、カモミールに似た花が咲く静かな場所です。思索・瞑想・回想に耽るブチャーニー。近くに普段人はめったに近寄らないし、そもそもカモミールに似た花が咲くその場所は下水道の近くで匂いがきつく人を寄せ付けない。ブチャーニーはその場所で足をフェンスに引っ掛けて瞑想するのだが、ある日その場所に微笑みの青年と呼ばれる人物がやってきて同じようにフェンスに足を引っかけて静かにしているのに気が付いた。なぜだかよくわからないが、

この青年は常に顔に微笑みを浮かべていた。ブチャーニーは微笑みの青年と簡単な挨拶以外はとくに話すこともなかったし、青年の方もブチャーニーに話しかけなかった。似たものが他にもいるということで、ブチャーニーはしばらく同じ場所ですごしたが、そのうちに青年は感染症を患っていることに気が付いた。ここで再び列が登場する。

この青年は感染症を患っており時々体の一部を激しく引

つ掻いていた。この青年は定期的に医療室に通っていたが、ちつとも治らなかつた。もともと監獄の医療室には国際保健医療サービス（IHMS）からのプロの医療班が交代でやってきたが、たいした治療が施されるわけではなかつた。しかし、それでも医療室の前には列ができていた。監獄には病人が多かつたが、監獄側では囚人を病状に従つて三グループに分け、重症者をA、中くらいの重症患者をB、軽い患者をCグループとしていた。Aグループに入るとダーウィンの病院に連れていかれることもあり、みなAグループに入りたがつた。だがそのためには、医療室に日参して病状を訴える必要があつた。そのため列ができるのである。こうした酷い生活の下でストレスが溜まり始めた囚人の間に「自傷文化（手首を切つての自殺や首を切つての自殺などの連鎖が起きる）」が育つてきた。本章では囚人のうち三名が自傷、すなわち自殺しており、その度に騒動が起きている。囚人の間で自称リーダーを名乗る人物を中心に監獄のボスに対して抗議活動が生じる。その抗議はほとんど聞き入れられることはなかつた。自殺が起きても監獄の管理制度に何ら変化は起きなかつた。こうした最中でも移民大臣がやってきてマヌス監獄の囚人に対して、オーストラリア入国はできないこと、パプアニューギニアに入国する

か、あるいは帰国するか選択肢がないことを論じ、囚人たちの絶望感を強くしていくのである。微笑みの青年は感染症のため亡くなつた。

第二章では、いきなりブチャーニーたち囚人の多くが列をつくり、監獄から近くの飛行場跡である広いグラウンドに集められる。それはマヌス監獄で暴動が起きたからである。マヌス監獄の過酷な環境とオーストラリア入国不可という絶望的な状況のなかで新しい監獄（マイク監獄）ができて囚人が増えると同時に、フォックス監獄から何人かの囚人が移動することになる状況を前に、一部の囚人たちの堪忍袋の緒が切れたのだ。一部の自称リーダーたちが音頭を取つて反乱を起こし、オーストラリア人看守やパプア人労働者をマヌス監獄より追い払つた。当初囚人たちの勢いが強く監獄側は劣勢だったが、最終的には島外からやつて来た突撃隊タスクフォースが配備されるとたちまち形勢は逆転し、二、三週間にわたる騒動も終焉し、囚人たちは他の収容所に移された。その後、マヌス監獄は閉鎖されたのである。本書はそこで終了する。

書評

本書の内容のうち、オーストラリア文学研究者が高く評

価する文学的・哲学的要素（ブチャーニーによる思索・回想・回想部分）を捨象した全く味も素っ気もない内容紹介（要約）となったが、ブチャーニーが伝えたかったマヌス監獄の過酷で拷問のような日々の出来事と監獄の管理体制（キリアールシステム）のおよそは理解できるだろう。

本書にしばしば登場するキリアールシステムとは耳慣れない概念だが、社会学でよく論じられる鉄の檻としての非情な官僚制度に似ている。

監獄文学では必ずトイレの問題が出てくるそうだが、トイレで長い列ができるということを想像しただけでも監獄生活が拷問であったということが理解できるし、評者にも耐えがたい事態である。小学生の時の夏の林間学校での朝食後のトイレの列で日々苦しんだことを思い出す。林間学校は数日の出来事だが、マヌス監獄でのそれは数年にわたる。拷問生活を数年も続けたら普通の人間なら精神がおかしくなり自傷文化に染まってしまいうだろう。ブチャーニーはそのような拷問生活を二〇一二年に再利用されたマヌス収容所で開始し、収容所が二〇一六年パプアニューギニア最高裁判所で憲法違反だとの判断が下された翌年の一七年に閉鎖されるまで耐え抜いたのである。しかもその間スマホを利用して外部に文学的・哲学的内容をもつマヌス監獄

の日々についてのドキュメンタリー情報を発信し続けたのである。常人では考えられないことだが、このような作業ができたこと自体がブチャーニーにとってストレス発散となったのかもしれない。

評者は、マレーシアやインドネシア方面から一九九〇年代になって多数のBPsがオーストラリアにやって来るようになり、その対応に苦慮しはじめたオーストラリア政府が、BPsを難民としてではなく、不法入国者である特別法犯として扱いはじめ、入国審査のためと称して大陸内の僻地に強制収容所を設置し、そこで審査を行ない始めてから、今日までの連邦政府の難民政策の概要は理解しているつもりでいたが、収容所内でのようなことが行なわれていたのかについての理解は足りなかったといわざるを得ない。

実は収容所内の過酷な生活については一九九〇年代の内強制収容所設置の頃から伝えられてはいた。収容所での審査待ちの時間が長いことから、収容者による抗議活動であるハンガーストライキや自傷活動が伝えられてはいた。ハンガーストライキでは収容者が自分の口を針と糸で縫うことも行われていた（これは日本の収容所でも行われていたようである）。また、収容所には家族ごと収容されてい

たが、長期収容により子どもたちの教育が疎かにされていることが問題視され、国連から何度が警告されていた。

もしこの時代にブチャーニーに匹敵する人物がいて、収容所内からあるいは収容所出所後に、本書のようなドキュメントもので、かつ文学的・時には哲学的な内容をもつものが出版され、本書のようにオーストラリア国内で注目されていれば、オーストラリア政府の強制収容所政策は国内外から非難され、今日のような酷い政策の導入はできなかったかもしれない。九〇年代からオーストラリアの難民政策は厳しくなり、いわゆる移民・難民政策の安全保障政策化が進み、BPs政策の代表であるパシフィック難民問題解決戦略再導入にともなう、公海上でのBPsと難民船の拿捕数や収容者数、また収容所の生活状況については政府による箝口令が敷かれマス収容所や収容者に関する情報は国民に伝えられなくなったが、そのような事態を含めて今日のように強制収容所に入れた上で、オーストラリア入国と永住を認めないとする難民条約を無視するような政策が二〇一〇年代に導入されることはなかったかもしれない。ところで、本書を読んだ人はほぼ間違いなくオーストラリアはなんて酷い国だろうと思うはずだ。本書の翻訳者や寄稿者、監訳者の文章はその点を強調している。しかし、

自称オーストラリア政府御用達学者として評者はオーストラリアがなぜこのような酷い難民政策を実施したのか、政府の用意した理屈に簡単に言及しておきたい。それは以下の通りである。

① オーストラリアは第二次世界大戦後、ヨーロッパやアジアから大量の避難民・難民を受け入れている。現在も、年間一万余千人の難民を受け入れている世界でも有数の難民受け入れ国である。難民は世界の難民収容所で国連難民高等弁務官により審査を受け出国の日を待っている。現在でも正規の形でオーストラリア入国を希望する人々が百万人以上いるはずだ。難民キャンプにいる人々の中には一〇年以上待っている人も多い。こうした人々を無視して不正入国BPsの入国を優先する訳にはいかない。

② 人間密輸業者に高額の密航料金を支払えるBPsは、政治難民というよりは経済難民である。なかには移民として入国できるものもある。現在では正規の難民としてか、あるいは正規のルートを使ってオーストラリアに入国してから庇護申請するもの（地位変更者）も多い。正規ルートを使用すべきである。難民キャンプでオーストラリア入国を待つものが多いので待ち切れず、BPsと

してやってくるのは横入り入国で許しがたい。また、難民キャンプに難民が溢れているのはオーストラリアのせいではない（なぜオーストラリアのみが非難されるのか）。

③ インドネシア方面からやって来る B P s には、テロリスト発生地域からの人々も多い（例えば、アフガニスタン、スリランカ、クルド地域など）。オーストラリアはイスラム国攻撃のための国際空爆部隊にも参加しており、イスラム国によりテロ標的国になっている。受入れには慎重になるべきである。

④ 人間密輸業者の密輸船は艦樓船が多い。これは公海上で沈没あるいは漂流させて近くにいる船に救助してもらうためである。国際的な航海法ではこのような場合、近くの船は救助しなければならないが、沈没や漂流はいつ起きるかわからないので、B P s の生命は常に危険に晒されている。人間密輸業者の暗躍を阻止する必要がある、厳しい対応も必要である。

⑤ 二〇〇一年のニューヨーク国際ビルハイジャックテロ以後テロ活動が活発化している（翌年にはインドネシアのバリ島での自動車自爆テロにより一〇〇名近くのオーストラリア人観光客が犠牲になっている）。オーストラ

リアの強硬な難民政策に対する国民の支持も高い。

⑥ オーストラリアは多文化主義国家なので、難民入国に對して対応は甘いとのイメージが世界に流布しているが、それは間違いである。非正規入国者には多文化主義の恩恵はないし、不正入国者への対応は厳格であるべきであることを知らしめる必要がある。

以上の理由から、オーストラリア政府は正規難民の入国を優先し、不正入国者 B P s に対してはより厳しい対応をとるのである。正規難民の積極的受入れ政策と多文化主義による難民への厚い支援があるからこそ、オーストラリアの不法入国難民政策、とくにパプアニューギニアのマヌス収容所とナウルの収容所を利用したパシフィック難民問題解決策は正当化されたのであろう。

厳しい B P s 政策の背景には伝統的な大陸北部へのアジア人の大量上陸への不安（危険は常に北からやって来る）があり、さらにその背景にはアジア人への人種差別意識が存在すると指摘されることも多いとはいえ、B P s のなかには、本物の政治難民であるブチャーニーのような人物も多いはずであり、不法入国の B P s だから特別法犯だとして一律に追い返す、あるいは問答無用の入国拒否するのは、以上の理由を挙げてても不当に非人道的であるという批

判を否定できないだろう。また、パプアニューギニアとナウルという外国に強制収容所を設置し、そこで審査するという口実の下、実は強制帰国を求める政策を実施するのは、植民地主義であるという批判を免れないであろう。

関根 政美

(明石書店、二〇二四年、本文四四三頁)

本書を読む際にはバランス感覚が必要だ。オーストラリア学会員のなかには、本書を一方的に称賛することへの不満を示すものもある。評者である私にとっては読むのが辛い本であった。評者は最初このブチャーニーの話を信じられなかったが、一九八〇年代初めの最初の訪豪の際に、シドニー空港や街中の公衆トイレの汚さと壊れた大便用トイレの多さ、そして、公衆電話の故障の多さに驚いたことを思い出し、信じられる内容だと確信した。

なお、本稿作成にあたり以下を参照した。飯笹佐代子・鎌田真弓編著『移動と境界——越境者からみるオーストラリア』（昭和堂、二〇二四年）の第三部「拒まれる越境——彷徨える難民」、および加藤めぐみ「書評 ベフルーズ・ブチャーニー（一谷智子・友永雄吾監訳）『山よりほかに友はなし——マヌス監獄を生きたあるクルド難民の物語』」（『オーストラリア研究』オーストラリア学会編集二〇二五年三月刊第三八号七六―七八頁）。